



SERVICE CLUB TO THE YMCA
名古屋 プラザ (月報)
THE Y'S MEN'S CLUB OF NAGOYA PLAZA



西日本区中部ホームページ・http://www.ys-chubu.jp/

2012年1月号

「主題」

国際会長 : 「とにかくやろうー成せばなる」

アジア地域会長 : 「とにかくやろうー成せばなる」

西日本区理事 : 「ワイズの原点、愛と奉仕で社会に貢献」

中部部長 : 「まず一歩 楽しもう、学ぼう、働こう、そしてつなげよう」

プラザクラブ会長 : 「ワイズなワイズになろう」

【IBC・DBC=出逢い、あれあい、交流でワイズの繋がりを深めワイズ活動の活性化を進めましょう。】

1 月例会および今後の予定案内

【1 月第 1 例会】

日時：1 月 1 2 日 (木)・1 8 : 4 5 -

場所：名古屋 YMCA 会議室

内容：卓話・リーダー 4 人「支援キャンプ報告」

【1 月第 2 例会】

日時：1 月 2 6 日 (木)・1 8 : 4 5 -

場所：名古屋 YMCA 会議室

内容：次月例会打ち合わせ

出席義務者：役員 (島崎・櫛田・後藤)

2 月担当者 (大島・小澤)

3 月担当者 (小澤・櫛田)

【今後の予定】

1. 2 月第 1 例会

日時：2 月 9 日 (木)・1 8 : 4 5 -

場所：名古屋 YMCA 会議室

2. 2 月第 2 例会

日時：2 月 2 3 日 (木)・1 8 : 4 5 -

場所：名古屋 YMCA 会議室

3. 大阪高槻ワイズメンズクラブ 30 周年記念例会

日時：4 月 1 5 日 (日)・1 4 : 0 0 - 1 8 : 3 0

場所：たかつき京都ホテル

4. 京都パレスワイズメンズクラブ 40 周年プラス記念例会

日時：4 月 2 2 日 (日)・1 5 : 0 0 - 2 0 : 0 0

場所：京都ホテルオークラ

5. 第 1 5 回西日本区大会

日時：6 月 9 日 (土) ~ 1 0 日 (日)

場所：大会 1 日目・滋賀県立文化産業交流会館

懇親会・長浜ロイヤルホテル

大会 2 日目・長浜文化会館

1 2 月例会およびその他活動

(敬称略)

役 員	会 員 氏 名	出 席 者				
		1	2	①	②	③
会長	大島 孝三郎	○	○	○	○	○
	小澤 幸男				○	
書記	櫛田 守隆	○	○			○
会計	後藤 猛	○	○	○	○	
直前会長	島崎 正剛	○			○	○
	鈴木 誉三	○	○	○	○	○
副会長	高田 廣	○	○	○	○	
	常盤 眞理子	○				
連絡主事	万福寺 昭美		○			
ゲスト	山本 茂樹	○				
	山田 鮎子	○				
課外活動	①街頭募金 12/11					
	②老人ホーム音楽慰問 12/18					
	③クリスマスキャロル 12/23					
出席率・%					88.9	
1. ニコボックス						
2. オークション						
当月合計／累計					5500	
2月号ブリテンの寄稿者は高田さんです。 400字詰原稿用紙4-5枚を目安にお願いします。 Eメール moritaka_kushida@ybb.ne.jp						
3月号 大島／4月号 後藤／5月号 常盤						

IBC=International Brother Clubs(国際兄弟クラブ)

DBC=Domestic Brother Clubs(国内兄弟クラブ)

12月名古屋・南山・プラザ合同例会



11日街頭募金活動



老人ホーム音楽慰問



クリスマスキャロル IN タワーズガーデン



12月第1例会報告

名古屋、南山、プラザクラブは12月10日、合同クリスマス例会をアイリス愛知で午後6時から開催、クラブ会員・ゲストら70人が集まった。

第1部は、讃美歌111番に続き、聖書朗読、西村清牧師は「イエスが馬小屋で生まれたのは事実ではないかもしれないが、真実である」とお話になる。第2部、ゲスト、ビジター紹介では、OBの山本さんと同伴者の山田鮎子さんがあいさつされる。「美しいバラ」の女性5人がアカペラで歌った後、食前感謝の祈禱に大島会長がほどよい長さのスピーチを済ませていざ乾杯、いよいよ会食が始まった。

お会いする機会がないほかのクラブの方々と杯を交わしながら親交を深め、カメラを向け合う姿がそこで見られる。わがプラザのテーブルも久しぶりに山本さんがゲストを伴いお見えになり、積もる話が尽きない。悲喜こもごものビンゴ大会も終え、「良いお年を」とあいさつを交わしながら街に出た。

12月第2例会報告

日時：12月22日(木)・18:45-19:30

場所：名古屋YMCA会議室

1. 会長報告

(1) 2013年度西日本区大会第3回実行委員会

1月6日(金)19:00よりYMCA会議室で開催。

(2) 大阪高槻クラブ30周年記念例会(詳細1面)

(3) 京都パレスクラブ40周年例会(詳細1面)

(4) 12月合同例会の残金

9300円が返金されましたので会計に繰り入れます。

2. 1月第1例会内容・大島

南三陸町子どもたちを支援したYMCAのリーダー4人による報告会とする。

3. 2月第1例会内容・大島

島崎さんの卓話、電話連絡で本人了解。

4. ブリテンの記事寄稿・櫛田

例会以外のYMCA、ワイズ、クラブなどの行事記事は、毎月の第1例会にてみなさんに執筆を指名しますので、よろしくお願いします

街頭募金支援活動に参加して

東日本大震災は忘れる事が出来ない。平成23年3月に発生し、未曾有の災害をもたらした。千年に一度とも言われる津波で、沢山の行方不明者、死者も出た。あれから9ヶ月が過ぎたが、復興は未だ思うように進まない。東北地方の冬は厳しく、テレビ新聞等で知る限りでも想像を絶するものがある。

YMCAとワイズメンズクラブは毎月11日を「街頭募金の日」と定め支援活動を行っており、今月は丁度9ヶ月目の12月11日、すこし冷え込んだが天気は良く絶好のコンディションだ。3時に栄の中央教会に集合する。はや加藤総主事をはじめYMCAの職員坂本さん達、そしてプラザクラブから大島会長、鈴木さん、後藤さんと4人も参加する。もちろん他クラブからも長谷川中部部長をはじめ数人が参加された。準備をして栄三越デパートの東側久屋大通の歩道に陣取り、スローガンの横断幕を張り、3時15分から募金活動に入る。皆で声を揃えて大震災の復興にご支援と通行する人にアピールする。櫛田さんも取材に来られていた。

師走の日曜日、人出は多いが財布の紐が固い。でも心温かい人もいて、募金箱にお金を投入された人にお礼を言う。「ありがとうございます。」YMCAの職員さん達の知人も通りかかり、支援募金をしてくれた。

約45分間の活動を終えて解散する。ボランティア活動のほんの一端だが、清々しくて気持ちが良い。

(高田 廣)

老人ホーム慰問演奏会

我々プラザクラブが奉仕活動の一環として実践する、老人ホーム慰問演奏会を12月18日午後1時30分より瑞穂区のアミュー高辻で開催した。まず、鈴木郁子先生の Hammond オルガンによる演奏が始まり、澄み切った音色でご老人の顔も和む。

家族の方々も参加されて賑やかな雰囲気だ。クリスマス飾りつけもあり舞台は最高のムード。奏でる曲に合唱の声も聞こえてくる。初出演された小澤さんのお友だち稲場禮子さんがご老人の中に入り、上手にみなさんとムードをたかめ、ギターの弾き語りでも歌も披露された。

相念寺の子供コーラス「ポコ・ア・ポコ」の合唱、

近藤さんのピアノと Hammond オルガンのアンサンブルは素晴らしかった。また小澤さん演奏の Hammond オルガンは、とても好感がもてた。最後は鈴木先生の「燃えよドラゴンズ」で締めて3時に終わる。楽器を片付け会場を後にした。

(高田 廣)

クリスマスキャロル IN タワーズガーデン

12月23日、名古屋駅前のタワーズガーデンに金城学院高校のハンドベルクラブの生徒たち15人とサンタクロース姿のYMCA会員、一般市民120人による聖歌隊がクリスマスソングを披露し、道行く人たちを楽しませた。

最初に登場したハンドベル音楽隊は、大小のベルを手前のテーブルに置き、交互に振りながら「ホワイトクリスマス」など4曲を風が強く吹く中、楽譜を飛ばされながらの演奏でした。澄んで透き通るような音色に耳を澄ませて聞き入る人もいた。

練習を重ねてきた老老男女混声合唱団は、配られた歌詞カードを手にした観客の人たちと一緒に「きよしこの夜」「もろびとこぞりて」など歌った。ハンドベル演奏を終えた生徒たちも見物席の後ろで飛び跳ねながら、楽しそうに合唱してクリスマス気分を盛り上げてくれた。

年初の原稿

本年が平々凡々の1年であることを祈りつつ12月にこの原稿を書いています。

私は保険業の仕事から様々なトラブルに立ち会います。自然災害や人為的な事故等々千差万別な問題に立ち会う機会が幸か不幸か多い。普通の生活者だとそうたびたび事故に遭遇することはあまりないと思う。報道で他人の事故や惨禍を目にしても、わが身に降りかかることは滅多にないのではないかと。しかしこの仕事に携わっているとひと月に何件もの事故に関わることも多い。最悪の場合は人の生死にかかわる場合もある。特に自動車事故は、事故の中でもっとも多い。通常は、自動車事故でも当然に自動車という物の損害（保険用語で物損）と表現するが、人の怪我がからむと人身事故となるが、圧的に物損事故の占める比率は7割で3割が人身事故となってくる。人身事故となると当然に物損も同時に発生する。そして当然に利害がからむからそうやすやすと相手があることだから解決はしない。

そんな事故のなかで随分いぜんのことになる自動車事故を紹介してみたいと思います。時間は20時を過ぎ

ていたとおもいます。私の契約者（A）が走行中に信号待ちで停車しているときに後方から来た相手者（B）の車に追突された。追突といってもそんなにスピードが出ていたわけではなく、停止しようとしてついぶつかった程度の追突の軽い事故で、こちらの過失は0%の問題もない事故だったのだが、悪い時は重なるもので、Bがそのまま逃走してしまいました。Aは30代前半の男性で割合に正義感の強い性格だったために、逃げたBを猛然と追跡し始めました。追っかけられるとBも必死で逃げたのです。推測するにちょっとしたカーチェイスだったかもしれません。A曰くそんなにスピードは出ていませんでしたと後日言っているのですが、逃げるBは必死だったのでしょう。今までの経験からするとこのような場合には、飲酒か無免許か無保険のいずれかの場合が多いのですが、そのへんは結局のところ不明だったのです。とにかくBは逃げた。でも外国映画のようにドライビングテクニックを駆使しての派手な逃走劇では決してなかったと思いますが、市街地を走ったのです。ものの5分もせずに逃げたBは信号無視で赤信号の交差点に突っ込んで青信号で交差点に進入してきた第三者のCと衝突事故を発生。はずみで交差点脇の民家のブロック塀に追突し家屋の一部も破損して逃走劇は終了。そして巻き添えを食らったCさんは左目の失明という重症を負ってしまったのです。もちろん逃げたBも怪我をしたのですがそんな大怪我ではありませんでした。そして追っかけたAは唖然とするばかりです。当然何でもない物損事故が大変な人身事故になってしまったのですが、被害者の立場であると思っていたものが、後日には共同不法行為として加害者へと変わってしまったのです。よく報道で警察がパトロールカーの追跡で事故が発生したときに職務上正当な追跡でしたと発表するのはこのへんの共同不法行為を回避するための発表ですが、民間人の場合は加害者という汚名を着せられてしまいます。いかに正しくてもこの場合泣き寝入りしかないのです。このように法律は私たちの日常生活の正しいと思う部分とかなりかけ離れた裁きをしますのでくれぐれもご注意ください。

（島崎 正剛）

聖書の言葉・たとえ話「ぶどう園の労働者」

【天の御国は、自分のぶどう園で働く労働者を雇いに朝早く出かけた主人のようなものです。彼は、労働者たちに1日1デナリの約束ができると、彼らをぶどう園にやった。それから、9時ごろ出かけてみると、別の人たちが市場に立っており、何もしないでいた。そこで、彼

はその人たちに言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当なものを上げるから。』彼らは出て行った。それからまた、12時ごろと3時ごろに出かけていって、同じようにした。また、5時ごろ出かけてみると、別の人たちが立っていたので、彼らに言った。『なぜ、1日中仕事をしないでここにいるのですか。』彼らは言った。『だれも雇ってくれないからです。』彼は言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。』（マタイの福音書 20: 1-7）】

【このたとえ話は16節まで続き、あらましはこうである。ぶどう園の主人は朝早く日雇いの労働者を市場へ探しに行き、1人「1日働いて1デナリ」の契約をする。同じように9時、12時、3時、5時に市場で労働者を探し、その都度1人ずつぶどう園に連れ帰って働かせた。さて1日の労働を終え、全員に一律1デナリの日当を支払った。これに、早朝から来て一生懸命働いた者が「最後の連中は1時間しか働かなかったのに私と同じ日当ですか」と文句をつけた。すると主人は「あなたとは1日1デナリと契約しました。それに、私は最後の人にもあなたと同じだけ上げたいのです。自分のものを自分の思うようにしてはいけないという法がありますか。それとも、気前がいい私を妬ましく思われるのですか。このように、後の者が先になり、先の者が後になるものです。」と答えた。】

【『幼児洗礼を受けて子どものころからのキリスト教徒だった人、大人になって教徒になった人、晩年に病床で「駆け込み」教徒になった人、誰でも神の国に行ける。だから長年クリスチャンをやっている人が文句を言うてはいけない。それは主人（神）の権限だから。』（「ふしぎなキリスト教」 橋爪大三郎・大澤真幸著 講談社現代新書 p220）という解釈らしいが、どうにもしっくり来ない。ヴェニス商人では、「肉1ポンドを切り取っても良いが、血は約束していない」と契約違反を主張する法学者のポーシャ。旅に出る主人から1タラントを預かった召使が、帰った主人に土に埋めてあった1タラントをそのまま返すと「怠け者のしもべよ、せめて銀行に預けるべきだった」と叱られた「タラントのたとえ話」。宗教に縁遠いわたしには、契約社会、経済的自由競争を重視する（新自由主義）アメリカ社会をつい連想してしまう。聖書にも引用され、「奴隷の道徳的教訓」と揶揄されるイソップ物語は、紀元前6世紀ごろギリシャで書かれたものだが、他人に頼らず努力した「アリとキリギリス」、驕り高ぶらず精進した「ウサギとカメ」、正直者は得をする「金の斧」など動物、植物や自然現象、ギリシャ神話の主人公などが登場する寓話の方が直截的で分かり易く、下流社会に身を置くわたしにはふさわしい気がする。】